

牧野井のぼん

西尾佐一郎さん（79歳、牧野本町二丁目在住）

△その1▽

1989. 9. 1号

三矢に生まれる

私が生まれたのは明治四十三年二月二十六日ですから、数えでちょうど八十歳、満七十九歳です。そのうち、大正十三年に十五歳で大阪に出てから、昭和五十一年に現在の住所の牧野に戻ってくるまで、人生の大半は大阪で過ごしたわけですね。ただ私の女房が上島の生まれですから、上島、下島、阪というところはわりあいよく知ってるわけです。

私の生家は、枚方の三矢で提灯屋をやっていました。店は提灯だけやのうて、菓子やらいろいろ置いてましたから、万屋ですね。そういう関係で、秋祭になるとお宮さんだけではなく氏子さんも提灯を出しはりますから、商売も忙しい。提灯は、軽いけれども嵩が張ります。小学校行ってる時分、よく「お母ちゃんの後ついてこい」言われて、磯島、渚、小倉、阪、上島までついてきたもんです。

その時分から、阪いうところはわりに裕福でしたね。ということ、水につかっているんですね。上島でも下島でも、下の方は三年に一回ぐらい水につかって作物が流されてしまうんですわ。

北河内ですとこの提灯屋の堺屋と言え、どこでも名が通ってました。堺屋宝来堂ですな。「宝来堂」となってるのはね、蒸し物するところは皆「〇〇堂」とつけたんですよ。

「あかつき」の呼人堂さんみたいなね。蒸し物というのは、お饅頭とか生菓子のことです。新町の猿屋さんのほかに、泥町の田中博愛堂、福山菊華堂さんが、それぞれ固有の名前をもっていました。

大正五年の四月に私は小学校一年に入ったわけですが、子供時代から今日まで育ってきた中で、いちばん鮮烈に記憶に残ってるのは小学校に入ったあくる年の大正六年十月一日のあの有名な淀川の大塚切れですな。

大塚切れ

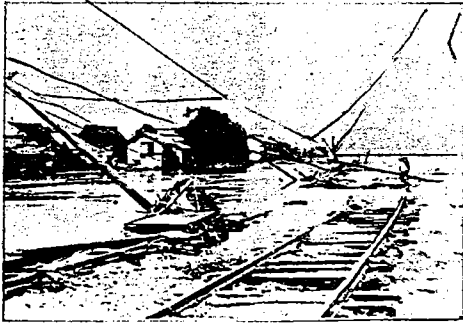
雨が三日も四日も降り続いて、どんどん淀川の水位が上がって、堤防の上いっぱいまで水がきたわけですね。向こう岸の高槻の方も危険やから山の方へ逃げたんですが、大塚いうところは淀川の水路に囲まれた輪中のような村ですから、みんな淀川の堤防の上に避難したわけですな。

枚方の方も、私の生まれたのは三矢ですから、すぐ裏が大川（淀川のこと）です。ぼちぼち堤防がくちかけたんで、それで「逃げる！」ということ、逃げたんです。京阪電車の通ってる丘の上がぼくらの通ってる枚方小学校だったんです。意賀美神社があるでしょう。梅林になってますが、その時分にはそこを「御殿山」って言ったんです。むずかしく言えば「長松山万年寺山」って言います。

《解説》

大塚切れ^レの時、天野川、船橋川も決壊し、牧野村は約二百戸が浸水している。十日夜にも再び出水、船橋川の決壊口から浸水して上島、下島、養父の数十戸が床上浸水、京阪電車も十八日まで不通となった。淀川の再改修が大きく問題化し、国費による大工事は、再三完成期限延期の後、昭和六年ようやく完成をみた。

（『枚方市史』より）



牧野村の洪水の惨状（大正六年）

我々は「皆逃げる！」ということで、山の上にある校舎、「西の校舎」いうて体育場がありましてね、「東の校舎」いうと今の意賀美神社の境内の下の梅林になってるところにありました。一段下の、今大阪ガスのパラボラが立ってるでしょう、そこが西の校舎です。そこからは淀川がまともに見えるんですね。

淀川の堤防いっぱい濁流が渦を巻いて流れてるんですな。「すごいなあー」と思ったですなあ。そのときには三日も四日も降り続けに降っていた雨がやんで、雲が切れて、大きい大きい丸い月が、ちょうど六甲山の方に沈もうとしていました。七歳のときでしたが、それが頭の中に今だに焼きついてますねえ。西の六甲山にお月さんが沈む。有名な蕪村の句に「菜の花や月は東に日は西に」というのがありますが、お日さんが出る夜明けの四時か五時頃になると、月が西山に沈むんです。それがちょうど十月ですわ。

人も牛も濁流に

そのとき、見とった誰ともなしに「わっ」という声があった。ばあーっと水煙りがあがりますとね、堤防の上の河川小屋（水防組合の道具を入れる小屋）、それがビューンと宙に、少なくとも五、六メートル飛んだでしょうかなあ。バラバラになって。そうすると、そこにおった人間も同じように

飛ばされてるんですよ。水防工事をやりましたからね。

大勢の人が一生懸命逃げるんですよ。ところが堤防の切れていく方が早いですよ。荷物を車に積んで逃げる人がこっちから見えてるんですよ。「おっさーん、早よ逃げよー」、こっちの山で何ほ言うても、向こうに聞こえるはずがおませんなわなあ、パーンと車ごととられてしまう。牛が引っ張ってたら、牛ごとはまってしまふ。そんなんを沢山見ましたねえ。あの水の切れるとき、そこがくぼんでるように、水をサーッと吸い込むんですねえ。

紙末さん

枚方小学校を、尋常六年と高等小学校二年……高等小学校は義務制じゃなかったんですが、今の新制中学校といっしょですね。それを終わって大正十三年、関東大震災のあったあくる年に卒業して、大阪へ見習い奉公に出ました。戦後は枚方にもいろいろな会社ができましたが、その時分はなかったもんですから、我々は大阪へ丁稚奉公に行っただけです。

「泥作」という言葉があります。やんちゃ坊主、餓鬼大将ということですよ。私は泥作とつねに言われてたもんで、「お前は大阪へ行け」ということになりました。私の奉公先を世話してくれたのは紙末さんでした。

枚方に「紙末」という魚屋さんがおました。大阪の今の中

央市場ができる前は、天満は青物（野菜、果物）が中心で、水産物関係は、川口に雑喉場（ざごば）というところがありました。あ、今落語家で「ざごば」いうのがいますなあ。あれは雑喉場からとったんですね。

紙末の親方を「紙佐」と言いました。今、岡本町に八幡屋というマーケットがあります。「アミティ枚方」という再開発ビルが建ってますね。あの西っかわの方で、今はアミティ枚方の建物となっていますが、その紙佐は狩野さんという方でした。昭和の初め頃までは、水産物の地方の中卸業をしてたんですね。大阪に大きな流通拠点があって、枚方に小さな末端の流通拠点があるという形です。

天満から車を引く

この紙佐さんが、大阪まで毎日魚の買い出しに行くんです。そのときは前の晩からガラガラと車を引っ張って行くんです。天満で朝の五時から始まる競市（けいち）で魚を仕入れ、六時頃に出発するんですね。車はふつう前引き二人、後押し一人か二人、かじ取り一人の四、五人で走ります。ガラガラッと音をたて、「はいよーっ」と声をかけて走りづめに走る。今のダンプカーといっしょですよ。その車走ってきたら皆よけるんですね。

車ちゅうものは、走ってはすみがついたらかえって楽に

なるんですね。それでどんどん走っていきんです。守口から八雲の堤防へと上っていく国道をどんどん走ってくる。だいたい二時間半ぐらいで帰ってくる。八時半か九時までに枚方へ着きます。おおかた二十キロぐらいあります。毎朝これやるんですが、走るのは交代です。今日の出番で大阪行きやったら、あくる日は地場で仕事、というぐあいですなあ。

ダアーツと戻ってきて、「荷が着いたぞー」ということですが、小番頭だけは車に乗ってきよりますねん。すぐ値段つけなあきませんから、走る相方あひかたになったら疲れてしもうてできません。それで乗ってくるんですわ。「ハイ、その鯛三尾で五円。蛸一尾二円。鯖は十尾で一円や」ということで、紙佐の庭に市がたつんです。

仕入れたものを値付けして、これは何ぼ、あれは何ぼと売る。これを北河内一円から、津田や郡津ちづつ、交野、村野、小倉上島、それに八幡からも買いくるんですね。こういうのを我々は「駄売り」と言うてました。魚屋さんだけでなく、一般の人にも売ることをしてましたし、料理もしてたんです。

北河内のマンチェスター

その時分、紙佐さんを除くと、岡（岡本町）いうたら寂しいもんでした。ぼくらの子供時分は、北河内では枚方（旧枚方町）は、北河内のマンチェスター”や言うてました。枚方

の三矢に郡役所があって、ここが政治、経済、文化の中心ですね。ですからここにやってくる人が多いですから、中瀬の呉服屋がある、神田屋がある、小間佐の薬屋がある、塩熊さんがある、畳屋の長田おきたがある、酒屋がある……というように、そこへくれば何でも物が揃ういうところでしたな。そんなんで、ようはやっとなんですよ。紙末は天満で買わずに雑喉場へ行って買物するというので、紙末の魚はいちばんええと言われたました。天満橋からはチンチン電車に乗って川口まで行てましたねえ。

その紙末さんが私の世話をしてくれよったんですわ。雑喉場には豊臣秀吉に認められた十大問屋がありましてね、私はそこでずっと務めて中央市場へ入って、戦争で途中一時切れましたけど、この道一筋に五十年やってきたわけです。

（続く）

《補 足》

紙佐さんは、昭和の初め頃までは魚の中卸業をしていて、買い出しは天満市場へ出かけていた。天満市場は青物が主体で魚は従だった。紙佐の分家の紙末さんは、魚の小売業を昭和三十年代中頃までいとなんでいたが、仕入れは魚専門の雑喉場まで出かけていたわけである。

牧野井のぼん

西尾佐一郎さん（79歳、牧野本町一丁目在住）

△その2▽

1989. 10. 1号

急行が止まるはずだった

大阪から今の枚方へ戻って思うのは、恐ろしいほど変わってしまったということですね。今住んでいる牧野本町一丁目には、もとは竹藪でした。こちら辺り帯は京阪電車が開発したんです。もともと京阪電車は、いつも水につかっている泥田ばかりの楠葉ではなく、牧野一帯を開発しようとしてたんですわ。その時分枚方は、東口（今の枚方市駅）よりも西口（今の枚方公園駅）の方が中心でした。だから西口に急行止めて、その次には牧野に急行止める、そういうプランのもとに土地を売り出したわけですね。

それを昭和十二年に買ったんですわ。広さがおおかた百二十坪そこそこです。そのときはなかなかそこに住むっていう気はおきませんでしたな。その時分は、中央市場で夜中の一時、二時から働いていましたから、今のようによく通る

なんちゅうわけにはいきませんしね。老後自分のふるさとに住むという気持で、「まあ買うとこか」って思ったんですわ。家建てたら一年間京阪電車のパスをくれ、ただで乗れるという条件つきでしたがね。

竹藪ばかり

戦後枚方に疎開してまた大阪に戻ったんですけれども、枚方に疎開していた時分には、買う土地遊ばせといてもしょうがないから、「食糧増産」って言われてましたから、自転車に肥積んで畑つくりに来たんですよ。小倉の町通ってね、池の端通って、その時分まで池があったですからそこを通過してそこから上がってイモつくりに来たんですわ。その時分は今おられる獣医さんの森さん、それから阪住宅前に讚景堂って玩具商があるでしょう、讚景堂さんも来ておられました。

その辺りは麦畑でしたね。そしてそのところに五軒か六軒の長屋が建ってました。そんなもんでしたよ。あとはもう畑と竹藪ばかりでした。この竹藪を買って京阪が住宅地を開発したんですわ。牧野本町一丁目、阪住宅のことですわ。

そういう時分、大谷橋の方へ行く線は、今の三分の二ぐらいの幅の狭い道でした。むしろあの道よりも穂谷川に沿った道の方が広かったです。この二つの道が斜めにぶつかるところ（牧野駅前）の角に、田中という菓子屋（この聞きとり当

時は菓子屋だったが、その後パン屋になっている（がありま
すねえ。ぼくの女房の実家が上島でしょ、年に何回か子供連
れて帰ってきますわねえ。「おじいちゃん、ちょっとすまん
けどこの荷物置いといてえな。後で取りにくるさかい」。お
じいちゃんはよう知っていますから、「やあ佐一ちゃん、子
供でけたんかいな」というようなことでした。

夜は真っ暗

電車道に沿った下島から上島への道はもつと狭かった。街
灯もところどころポツンポツンとあるだけで、川の流れてる
ところ（「中の橋」）なんか真っ暗がりでしたねえ。女房はほ
くと結婚するまでは、交野無尽（近畿相互銀行Ⅱ近畿銀行の
前身）に勤めてました。今枚方三越のあるところが本店でし
た。やっぱり今といっしょで、五時終業いうても六時、七時
になりましたね。冬場になると暗うて危のうてしょうないか
ら、お父さんがいつも牧野駅まで迎えにきてました。

晩の七時、八時になったら家の灯も消えますから、道は真
っ暗がりです。家も少ないしね。だから電車が通ったら、ビ
ヤーンと明るい窓の灯が帯のように走っていくわけですなあ。
自動車を通るわけでもなし。

今の御殿山駅はまだなかったですから、御殿山近くの渚と
か磯島の人は、皆牧野駅まで歩いてきたんですわ。京阪電車

も今のような車輛と違てタラップがついとって、止まったら
車掌さんがドアを開け、金もらって切符切るんですわ。切符
は、乗って中で買わんと降りしなに買うてました。牧野駅な
んかやったら、止まっても乗る人も降りる人も一人か二人ぐ
らいでした。

「じんど」のワラを抜く

我々の子供時分、どんな遊びをしとったかお話ししましよ
うか。

今の子供とぼくらの時分の子供と、やるのがぜんぜん違
いましたな。今はテレビがありゲームがあり何がありですが、
ぼくらの時分は夏は川へじゃことりに行く。冬は兵隊ごっこ
でしたな。六年生ぐらいが大將になって、山へ行って竹切っ
て、笹も取って小屋作って籠城する。竹を切ると怒られるの
で夕方暗うなつてから竹切ってくる。

それから、田んぼの稲刈りが終わるとタコ上げして遊んだり
もしますけど、じんどでよう遊びましたなあ。じんどという
のは、稲こきしたワラを積んでますねえ。今はワラをみんな
バラバラにしてしまいますけれど、その時分はワラを小屋
みみたいな形に積んでました。それをじんどと言いましたね。
稲架の竹を組んで、ワラを積んでいって、根っこの方と根っ
この方を合わしていくんですわ。この積み方を見るとねえ、



「死んでまえー」

ところがワラを抜くと穴があくでしょう、するとそこに入って寝るんです。ぬくいでっせ。ぬくなったらね、ぼくとこなんかお菓子売ってましたから、「佐一ちゃん、去んでキャラメルちよろまかしてこい」。石井の林さんと薬屋や。

「おまえ、仁丹持ってこいや」言うて、キャラメルねぶった後仁丹ねぶって、口の中苦いの、そんなことしていっしょに遊んだんです。そうするとしまいに、誰か悪い奴がマッチ持ってくる。それで燃えたんですよね、じんどが。ぼくはしたことないんやけど、うちは堺屋でしょう、「堺屋の佐一ちゃんやとった。あいつに違いない」ということになるんですわ。あくる日は学校に呼ばれるしねえ、巡査にも呼ばれ

ぜったい北南には積んでませぬねえ。西東に積んでます。

そうすると、我々子供は南向けのお日さんのよう当たるところで遊ぶんですわ。田んぼの土はなんぼ乾いてるいうても、田んぼでしょ、座ったら湿ります。それでワラを抜くんです。そしてそれを敷くんです。

る。巡査いうたら怖かったですよ。「おまえ、火つけたやろ」

「知らん」「そんなもん勝手に火い出るか！」と言われる。

知らんもんは知らんのに。家に帰ると親父に怒られて、手と足くくって天井に吊されるしねえ。「そんな悪いことする奴は死んでまえー」いうて手と足くくられて。そのあとはもう、じんどの遊びの中でもそういう悪さをするのを止めました。

ただねえ、勝手に焼いたら怒られますけど、堤防のしば焼きするとき手伝いに行っただんです。これはおっさん喜ぶんですよ。ワラ束とマッチ持って火つけたら、バアッとしばが燃えるでしょう、向こうまで燃えて家のそばまでいったらあかんというので、走って行ってパッパッと叩いて消すわけですわ。そういうようなときには喜ばれますな。

丸太に乗る

今、枚方市駅の西側の淀川のそばに社会保険庁ってあるでしょう。あの辺からこっちの辺りは安居川があって、それの前は「安居川」って言ってたんです。「安居」は仏教用語でしてね、「夏安居」「冬安居」「雨安居」って言ってました。これは仏法の言葉で、年三回の修業のことですわ。中瀬さんなんかは、自分とこを「安居荘」って言うてます。今は、皆が安居川、安居川言うてるから「安居荘」って変えてますわ。あそこに酒井さんという材木屋があってねえ、その裏側に

池があつて材木がいっぱいあつたんですわ、筏いかだにして。材木は水につけて乾かすんですわ。上で乾かしたら、木が芯まで乾きません。水につけたら水で締まって、はじめて芯まで乾くんですわ。それで大阪港でも、陸に積まんとみな水につけるとるんですわ。

冬場に薄水が張るとねえ、行かんでもいいのに行きたいんですなあ。大きな丸太の上に乗ってどんどん渡るんですわ。嬉しいんですわなあ。ぼくははまったことないんやけど、中にはドッポーンとはまる奴が出てくる。寒いでしょう。それに家に帰ったら怒られて泣かなならん。それで川原行つて一枚ずつ脱いで、ヨシがあるのを燃やして乾かすんですわ。

川遊び

ところが、燃やしているうちはええけど、飛び火するんですわ。ヨシ原に燃え移る。怖いですよ。ゴオーツと燃える。片一方に安居川があつて、もう片一方に、文祿堤ぶんろくづつみという堤の内側にあつた水吐け水がありました。その川と川の間やからいいんですけど、そやなかつたら大事おほごとですわ。燃え始めたら濡れたもん放つて逃げまんねん。逃げたら、これがきつとわかりまんねん。あれは堺屋さかいの佐一さいちちゃんに石井の林ちゃんに中瀬の秀ちゃん……と言われてねえ、親父に「おまえらみたいなもん死んでまえーっ」って怒られて。

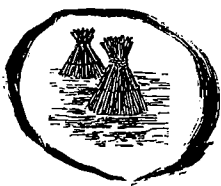
夏になると、夏休みに入る前、学校は生徒をぜんぶ集めて、ぜったい淀川よどがわにおいてはならん、川遊びするんなら天野川の鵜う(かささぎ)橋から上かみ、ぜったい下しもで遊んだらあかん、ところが、いかんと言われたら子供ちゅうのは行きたいんですわ。

夏の七、八月頃になるとねえ、水がなくなってくるでしょう、ここにもちよつと溜り水ができ、そこにもちよつと溜り水ができ……という具合です。天野川でも、下から水が湧いてるところがあるんですよ。堤防のふちとかね、田んぼからの水なんかが堤防の下から湧くんですなあ。きつとそこに鰻がおる。鮒とか鯰がおる。それをとりに行くんですわ。魚をとろうとして亀に咬まれたこともある。「えらい四角いもんおるでえ」いうて、「あ、痛いたえー」って、亀に咬まれよつた。

(続く)

《補 足》

じんどの由来であるが、細い竹を編んで川の中に立て、魚を追い込んで捕えるものを「じんどう」(笹ささ葦)



“じんどう” (広辞苑より)

と言う。ワラの積み方は地方によって違うが、このじんどうによく似た積み方も多いので、この呼び名ができたのかもしれない。(『広辞苑』参照)

牧野井のぼん

西尾佐一郎さん（79歳、牧野本町一丁目在住）

△その3▽

1989. 11. 1号

浮き砂はこわい

そんなことして遊んでるけど、やっぱり水にひっぱられるんですなあ。

天野川の水が淀川に入るところに、上流から流れてくる砂がずうっと沖州おきすみたいになってるんですわ。最初のところは土が固いんですけど、先の方は砂が浮いとる。そこまで行ったらスポツとはまるんだ。それで毎年何人か死による。ぼくは堤防の線を見ながら行って、そこから先はせったい行かなんですわ。それから先行くと、ずうっと流れが入ってきて土が舞まうとる。柵しほのようになって浮いとって、下はないんですわ。それでスポツとはまりよる。はまったら最後ですわ。砂というものはねえ、流れと当たりますとねえ、ずうっと浮草うきくさのように浮くんですわ。それがこわいんですわ。そこへ藻でも生えたら完全に見分けがつかせんわな。

それがいちばんこわいのが前島まへじまの渡し。今度の枚方の広報

にのってるけど、京阪電車の牧野駅の階段を西に抜けまして、牧野駅前ハイツの南側の道をずっと西へ行くと前島に行くんです。そこらはシジミが多かったんですわ。シジミは天野川にもおるんですが、小さいです。前島の大川（淀川）の方が粒が大きい。腰に袋つけて行くんだが、渡しに乗せてもろたらええんですよ。それが舟に乗らんと泳いでつかまろうとする。船頭が「こらっ！」と怒るのが面白いんです。対岸の前島に行くと、工兵隊の演習場になっているんですな。高槻の工兵隊の演習を見て、そこで遊ぶんですよ。あんまり沖へ行かずに岸でシジミとってたらいいのに沖へ行くんですよ。

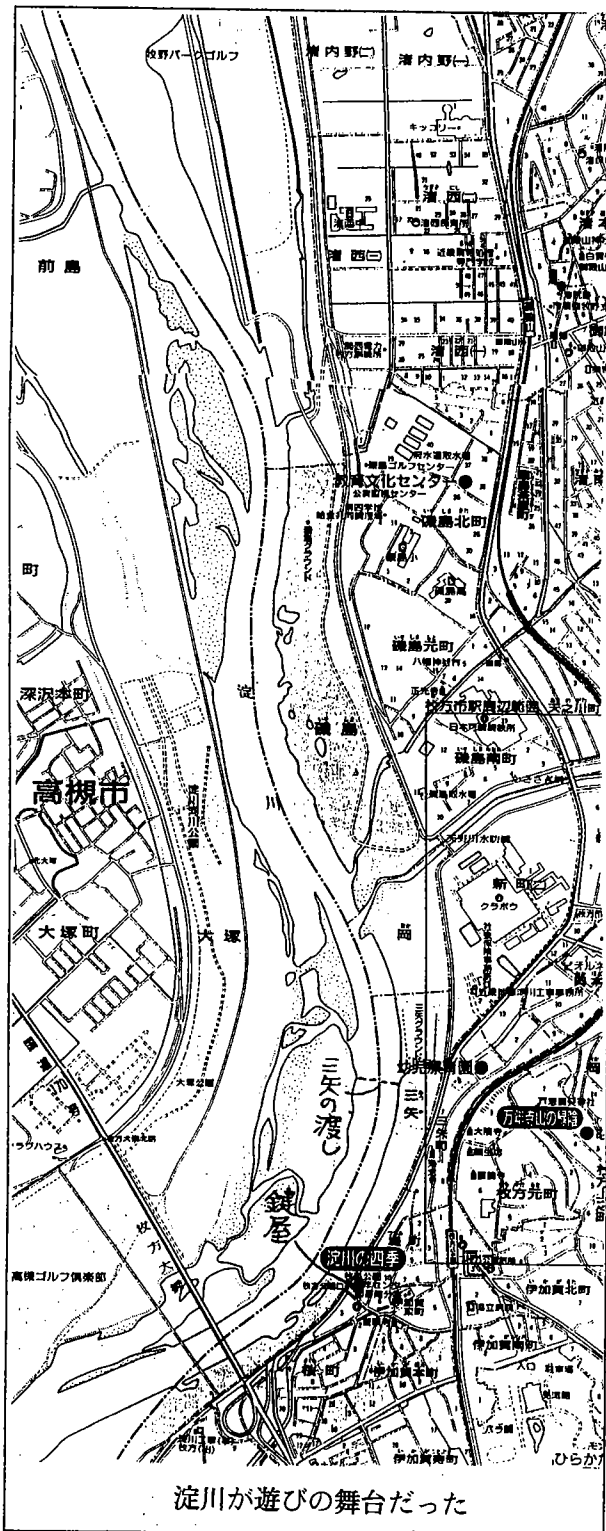
ここで溺れて死んだら、死体は鍵屋の浦まで、せったい浮かなんだ。鍵屋浦には今枚方大橋がかかっているでしょ、あの辺りで浮いて杭かにかかるとる。

淀川の水の流れは三本おまんねん。木津川の流れのものと、宇治川の流れと、桂川の流れと。その三本の流れはいつまでも分れとる。前島のところで流れる水は木津川の流れで、いちばん水勢が強いんです。そこから、その水にまき込まれると、ずうっと底を流されて鍵屋浦のところで浮かばなんだ。だいたい丸一日かかりましたな、浮いてくるまでに。死体はね、鉤かぎのついた、船の錨いかりのようなものでひっかけるんです。そんなことで、行ったらいかんというところに行っていました。

曳き舟につかまって

それと、川蒸気、外輪船ですね。あれが枚方の三矢の浜のところで止まるんですわな。そこでちょっといっぺん休息しよるんですわ。そこでぼくらは、船が上へ向いて動くのを待っよるんですわ。たいがい、午前十時頃着いて、午後二時頃出るところで待って、船が出る前になったらドボーン、ドボーンで飛び込むんですわ。川蒸気は、うしろに曳き舟をつない

でる。ずうっとつながってる舟につかまるんですわ。いちばん真ん中のところは船頭おれしまへん。六ばいの舟あったら、三ばい目といちばんラストに乗ってますわ。八ばいやったら二ばい目ごとに乗っとる。あとの舟はおっさん降りて、先まで歩いて行くんですわ。曳き舟は時間がかかりますからな。ぼくら、パツとその舟にくらいつくんですわ。おっさんに怒られるさかい、舟と舟の間に入ってたらわかれしまへん。それで、ずっと上流の方まで上った時分にパツと手を離すんですわ。大川（淀川）をずうっと流れて高槻の方に泳ぎ着く



淀川が遊びの舞台だった

んです。向こうは一帶ずうっとヨシ原です。そこで一服するんですな。そこからまた飛び込んで、ずっと流れ下って枚方の浜へ戻ってくるわけです。

そうするとねえ、鼻の頭がピカーッと光るんですよ。家に帰ったら、「淀川へ行ったやろ」いうて、晩飯食わしてもらえしまへん。それで、浮草によく似た葉がおまんねん。キューッと絞ったら真っ黒けの汁の出る藻がおました。葉が小判型でね、これをつぶして鼻をこするんですよ。そうすると鼻の光ってるところが消える。それで「わしゃ泳がん」言うんやが、子供やなあ、でぼちんのとこだけがピカーッと光ってる。それがわかれしまへんやろ、「また行てきたな」「行てへん」「行かへんのやったら、ピカピカしてる、それ何や」「光ってへん」言うて……。

アカガエルはうまい

それから、こんなこともありましたなあ。天野川の堤防伝うてずうっと行て交野の磐船通って、そして神宮寺、倉治行て源氏の滝に遊びに行くんですよ。朝飯食たらすぐ出かけるんです。その頃京阪の交野線なんておまへんで。滝へ行きますとねえ、こんな小さい蟹いてまっしゃろ、サワガニ。それからアカガエル。アカガエルなんか、ピシッとむしったら、うまいですよ。小さいやつつかまえて、ピヤッと引き裂くん

です。あんなうまいもんじゃないわ。サワガニも、今料理屋行くと、ちょっとした料理に唐揚げして出てきますけど、あれなんかとって、それで滝に打たれて……。

桃泥棒

滝に打たれに行きしなに、遠回りして神宮寺の桃畑へ行つて、五つ六つとりまんねん。それでシャツの中に入れて落ちんように腰のとこひもでくくって。「わたしや桃とりました」って言うてるようなもんですわ。それですぐにおっさんに怒られまんねん。

おっさんに見つかったとき、おっさん鍬をかたげて長靴はいて、鍬なんか置いといたらしいのかたげて追っかけてきまんねん。それで鍬が桃の木にひっかかりまんねん。それを一生懸命外しとる。その間にパアッと逃げてしまふんですよ。

片町線の汽車がパッパッパッパッ煙を吐いて走ってきよる。それにつかまるんですよ。汽車より走る方が早い。車掌が「こら」と怒ったら、パッと手を放す。車掌が引込んだら、またパッとつかまる。そやけど、



そんなんしてたら息続かへんから長いことやってられませんか。それで、しばらく乗ったら放して逃げるんですわ。そしてたらおっさん、もう追いかけれへん。

ひと夏に五、六回ぐらい行くんですよ。「今日も行くか」言うて一週間ぐらい続けて行くときもある。向こうは「また来よる」と待ってるから、「もう休もか」と休んだりしてねえ。

桃盗むし芋盗むし。それがわりと学校へは言うてきませんもんなあ。田舎の人のおおらかな心でしたね。神宮寺の桃はねえ、水蜜桃みたいで、固ないし、ぼおっと毛なかん生えてええ桃でした。

グループを率いて

そういう遊びをして過ごしてきました。上島の思い出いろいろあるし、枚方の思い出いろいろあるけど、ま、自分の遊んできた子供時分のことを振り返ってみると、今の子供たちは自然といっしょに遊ぶということが少なくなりましたねえ。テレビがいちばんでこういう施設（公民館）もいろいろあるし、ぼくらの時分は図書館なんていっこともあれしまへん。そのかわりに、子供は子供としてのわるさはしたけれども、それでもルールは守ってました。

だいたいグループを組んだから、グループ長がいましたな

あ。ぼくはたいがいグループ長でした。枚方小学校でも、学校から分れて帰るのが、上の町へ帰る筋、降りて蔵の谷通って伊加賀へ帰る筋、それからこっちの三矢の坂降りて帰る三矢の者、それから岡裏町（今の岡南町）を通過って岡（岡本町）方面へ帰る組と四組がおました。

石合戦

夏休みになるとまた分れる。面白いですよ。天野川に鵜橋がある。向かい側が天之川の集落でしょ。天之川とこっちの岡新町の組と石投げやりよる。そのかわり、どっちの組も橋を越えて向こうへはぜったいに行かない。鵜橋のあっちとこっちで、ビヤッって石の投げ合いや。面白いのは、初め子供ばかりで、だんだん大人が応援に出てきよる。もうひとつ面白いのは、「おーい、放るぞー」「放ってみいー」「いくぞー」、そのうち、「あ、大人が出てきよったな。おとっちゃん呼んでこー」て、あっちで言うてる。

声をかける

「放るぞー」て、ちゃんと言うてから放る。向こう側も、「放るぞー」と言うてから放る。これは大阪人特有ですわなあ。「どついたらるか」「どつて（どついで）みい」「どつたら痛いぞ」「わかつたるわい。ほっとけ。どついでみい」と

相談ずくでやるのが大阪人。関東やったらいきなりポカーンとやって喧嘩になるのが、大阪人は「どつくぞ」「どつてみい」……相談ずくでしとる。子供の時分から、それはそうでしたなあ。それから、これ以上やったらいかんというところへきたら、グループ長が「もうやめとけや」言うてやめました。

兵隊ごっこ

蔵の谷組と枚方の三矢組とは、学校の上の坂の、今大阪ガスのパラボラのあるところ、その頂上をどっちが先に占領するかってね。下から上がって、北はお宮さんへ参る道を行かんならん。相手の斥候に見つけられたら負けや。頭に木いっばいくくりつけて偽装して竹藪の中入ったりして、そらおもしろいことしたもんでせ。枚方へは大阪から八連隊、三十七連隊の兵隊さんがよう演習に来ました。禁野の火薬庫にも八連隊と三十七連隊が一週間ほど交代で来てました。そういう関係で、必ず枚方の町で休けいしましたやろ、それを見るわけですわ。

幼いときの思い出というものは、懐かしく果てしのないもんですな。淀川の流れを見ていると、限りのない郷愁がわいてきます。

(了)

